
『愛知大学史研究』の創刊にあたって

大島隆雄

〈愛知大学名誉教授、東亜同文書院大学記念センター客員研究員〉

藤田佳久教授を研究代表者とする、「愛知大学・東亜同文書院大学記念センターの情報公開と東亜同文書院をめぐる総合的研究の推進プロジェクト」が、文部科学省の平成18年度の私立大学学術研究高度化推進事業（オープン・リサーチ・センター整備事業）に選定された。

このプロジェクトの主要課題は、その表題が示すように、本学が所蔵する東亜同文書院関係の史資料を広く公開することと、同文書院に関する総合的研究を行ない、その研究成果をも公表することである。しかし本学が同文書院大学の後身校と位置づけられる以上、同文書院の総合的研究は、同大学から愛知大学への発展過程を究明することをもって完結する。その意味で本プロジェクトのなかに、一定の比重をもって愛知大学史研究が設けられた。

この愛知大学史研究については、目下つぎのようなテーマが設定されている。(1)「東亜同文書院大学から愛知大学への発展の理論的・実証的研究」、(2)「愛知大学の父たち——本間喜一、小岩井浄、林毅陸——の学問と思想」、この2つである。その第1は、東亜同文書院大学から愛知大学への発展は、なんら質的な変化をともしない直線的な継承関係なのか、それともその過程で何かを捨て、新たに何かを付加して質的变化をもたらした、言葉の真の意味での発展であったのかという問題である。またその第2は、いずれも東亜同文書院大学か、その経営母体「東亜同文会」の関係者であった、愛知大学の上記3名の創立者たちが、いったいどのような学問と思想の持ち主であったか、という問題である。この点の解明は、創立者たちの高弟たちがすでに相当の高齢に達しているために、急がねばならない。

ここで顧みなければならないのは、かつて本学が1992年から2001年にかけて、『愛知大学五十年史』を編纂した時の厳しくも有益な経験である。同史編纂委員会は、執筆者をはじめ多くの関係者の協力をえて、1997年には『資料編』を、また2000年には『通史編』を無事刊行できた。しかしそれと平行して同編纂委員会は、1994年から2001年にかけて、外来講演者の講演、独自の分析論文、関係史資料の紹介、関係者へのインタビュー等を収録した研究誌『愛知大学史紀要』、第1号から第4号別冊までを刊行した。これらの研究成果は、正史の内容を充実させるにあたっておおいに寄与した。すなわち、大学史や自校史に対する継続的な究明なしには、正確で内容ゆたかな個別沿革史は編めないということである。

この『愛知大学史紀要』のなかで、いまでもその意義を失わないどころか、ますますそれを高めている2つの成果がある。それは、大学史を研究し、叙述するにあたっての正しい方法論を示された2人の講演である。その1つは、大学史の泰斗、寺崎昌男氏の講演「大学史の意義を考える」（『愛知大学史紀要』第1号、1994年3月）である。氏によれば、個別沿革史といえども、それは創立者の顕彰や大学にまつわるエピソードの寄せ集め、すなわち物語ではなく、出所を示す注を付すことのできる確実な史実に

もとづき構成される科学的で客観的な歴史学の一分野でなければならないということである。したがって氏は、大学にとって都合のよいことはもちろん、そうでないことも率直に記し、むしろ後者の克服過程を明らかにすることこそが貴重であると説かれている。

いま1つは、日本の大学の戦後改革の研究者、羽田貴史氏の講演「戦後大学改革の過程——戦後大学政策・制度・行政の展開——」（同誌）である。氏は個別大学沿革史といえども、日本史と、とくに日本教育史の流れに位置づけて、分析・叙述されねばならないと主張された。というのも、個別大学史も不可避的にそれによって規定されているからである、と。これらの諸理論は、幸い本学に重要な遺産となって残されている。

『五十年史』の編纂委員会も解散され、すでに5年以上の歳月が流れたが、ここに冒頭述べたプロジェクトの一環として、前身校、東亜同文書院大学とその発展形態としての、後身校、愛知大学という新たな視点で、大学史を研究することが要請されるに至った。新たな視点とは、『五十年史』の段階では、東亜同文書院大学を前身校として位置づけようという、問題提起はなされていたが、同校についての研究がまだまだ十分には進捗していなかったため、その継承関係は明確にされないまま終わっていたからである。

したがって、今回発行する『愛知大学史研究』は、そこに焦点をあてた研究誌であり、そのため読者には本誌は、かつての『愛知大学史紀要』の続編であるとともに、その新たな展開の姿であると理解していただきたい。

そこでこの創刊号を、まず「世界と日本の大学史の流れの中での東亜同文書院と愛知大学」という特集号として編むことにした。その理由は、たしかにいまでは東亜同文書院にまで広げてはいるが、それでも同文書院—愛知大学という狭い視野に縛られ、いわばひとりよがりの自校中心主義の陥穽に陥らないようにするためである。

巻頭論文、「世界大学史と愛知大学」の執筆者、酒井吉栄氏は、本来憲法学者であるが、かつて大著『学問の自由・大学の自治研究』（評論社、1979年）を世に問い、その後も論稿、「愛知大学の構造、特質および歴史について——マクロの世界とミクロの観点から——」（『愛知大学史紀要』、第4号、2001年3月）を公にしている。

今回の研究において氏の主たる主張は次の2点にある。その第1点は、愛知大学が第二次世界大戦に敗北した直後の1946年、新たな建学の精神をもって創立されたことと、1806年ナポレオン軍に敗北したプロイセンで1809/10年、フンボルト精神でベルリン大学が創設されたこと、との間には、歴史的事情における著しい近似性が存在するという指摘である。そして第2点は、これまで本学の「設立趣意書」の起草者を通説的に小岩井浄氏としていたのを、初代学長林毅陸氏と断定したことである。目下のところ本学関係者のあいだでは、第1の主張についてはともかく、第2点目については意見は一致していない。したがって、ここに酒井論文を掲載するのは、これで酒井説が大学の公式見解になったことを示すものではなく、むしろこれを契機にこの問題の分析を深め、討論を喚起していただくためである。

本創刊号のもう1つの重点は、2006年度秋学期から学生にたいしてリレー講義形式で始まった総合科目「大学史」の担当者の協力をえて、2007年3月10日に開催された公開シンポジウム「世界と日本の大学史の流れの中での東亜同文書院と愛知大学」の内容を収録したことである。この壮大なテーマを扱うにあたっては、私たちの力量はまだ不足しているが、それでもシンポジウムの報告と討論とはたいへん活発なものとなった。これをも参考にしながら、愛知大学における今後の大学史研究と総合科目「大学史」の内容がいつそう充実していくことを願っている。

そして本創刊号のさらにもう1つの重点は、本学の学長経験者に、本学創立期に関わる内容の講演をしていただき、それを収録したことである。それは、4月28日に行なわれた石井吉也氏（第11代・第13代学長）の講演、「愛知大学の創立者 本間喜一——法学者としての軌跡——」である。これは、石井氏が本間氏の高弟として、その師の学問、商法とさらにその基底にある法哲学の内容を分析し、専門外の者にも比較的分かりやすく話されたものであり、本プロジェクトの課題の一つ「創立者たちの学問と思想」の究明に大いに寄与するものになった。

そして本号において、本学の創立者、本間喜一名誉学長の御遺族から寄贈された資料・遺品についてリストを作成し、その一部ををようやく公表する運びとなった。また、同名誉学長に関する同様のリストの継続分、ならびに第3代学長小岩井淨氏と同夫人小岩井多嘉子氏の御遺族から寄贈された資料・遺品のリストは、追って本誌次号に掲載する予定である。

2007年9月